Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-07-12

地域歴史遺産としての区有文書の可能性

板垣，貴志

(Citation)
歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集,13:25-26

(Issue Date)
2015-01-31

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008747

地域連携協議会報告資料　　2015年1月31日

神戸大学大学院人文学研究科特命講師
板垣　貴志

地域歴史遺産としての区有文書の可能性

１．はじめに　加西市野上町歴史遺産調査で直面した事態

地元の要望　キリシタン信仰調査　隠れキリシタンの里
→　歴史の多面性、多様性、重層性を捨象した《歴史の動員》《歴史の一面化》
大学側の直面した課題　根拠（歴史資料）に基づく学術的歴史研究の魅力をいかに伝えるか！

2009年豪雨水害　歴史資料ネットワーク活動
宍粟市一宮町閏賀地区での区有文書調査で得られた知見を加西市野上町にて援用
→　はたしてどれほどの効果が地元にあったのか？（森幸三氏のコメント）

報告内容　汎用性のある区有文書をまちづくりに活用する実践的手法　／　可能性と限界

２.《地域歴史遺産》という考え方

歴史資料は「ある」ものではなく、
それを大切に守り伝えようとする人々がいてはじめて、
歴史資料に「なる」もの

どこにでもあるけれども、そこにしかないもの

歴史資料を取り巻く人と人との関係性も視野に【人間の関係性も含めた歴史資料論】
地域歴史遺産とは、「モノそのもの」あるいは「歴史資料から得られる情報」だけを切り取って考察するのではなく、人と人との関係性のなかでその意味（価値）を見いだす。地域歴史遺産とは、不断の運動・実践を内包した概念であり、研究者と地域住民に「地域の核」とは何かという課題を問い続ける動態的な考え方。

《世界文化遺産》と《地域歴史遺産》　　指定文化財　／　未指定文化財

歴史資料の急激な散逸　／　生活の激変　／　アナログ文化・世代の減少　／　理解不能な文字

喫緊の課題　まちづくり活動に民間所在の歴史資料を活かす！　古文書よりも人を主役にして！

３．　地域の歴史資料を取り巻く現状と近現代史料の可能性

・人口減少社会へ突入　中山間部･･･少子高齢化、過疎化　／　都市部　･･･激しい人口移動
↓
かつての暮らしや生活の知恵を知る世代の減少　　グローバル化　＝　日常生活と生活環境の画一化
↓
現代人の生活空間への感覚は貧困になり地域への愛着も薄れる
↑
地縁的関わりの再考と画一化への対抗　＝　**《地域の固有性》**が凝縮された地域の歴史資料への着目
どこにでもある明治・大正・昭和期の近現代史料　＝　個人的記憶を呼び覚ます可能性を秘める
↓
身の回りの生活環境の変化の**《記憶》**を**《記録》**に留め、
それがいまの日常生活にどのようにつながっているのか明らかにすることの重要性
旧住民＝懐かしいこと　新住民＝驚き
→　新旧住民を交えた史料整理の場は地域づくりのヒントを提供する！

４．　区有文書を用いた研究と実践

⇒　近世からの記録を現代に生きる人々の記憶と交錯させる研究・実践手法！　汎用性

生活空間の画一化に対抗　／　老人の生き甲斐　子育ての環境　／　集落のまちづくり活動

・記録すること　…　土地　権利関係
・記憶すること　…　出稼ぎ体験　／　話しやすいこと　話しにくいこと

《よそ者》である大学関係者の限界　／　話しやすい記憶しか記録化できない
《当事者》である地元住民、行政関係者の限界　／　話しやすい記憶しか記録化しようとしない

⇒ 専門家による記録の学術的な分析に基づく歴史叙述の必要性！

５．おわりに　若干の問題提起　～地域歴史遺産概念に埋め込まれた「公的なもの」について～

何のための「社会貢献」？　（鷲田清一『パラレルな知性』晶文社、2013 年）

> じぶんたちはけっして楽ではない労働をつうじていったい社会の何に貢献しているのか。企業活動の社会的貢献へのそういう問いかけは、時代とともに移り変わってきた。いつの時代も、最後は「家族を養うため」という理由をあげる人は少なくないが、しかしそれだけのために汗水たらして働いてきたと言い切れる人は少ない。
> 企業のなかで休む時間も惜しんで働くこと、そのことが、今という時代をともに生きている未だ会ったことのない同胞たちの幸福にきっとどこかでつながっているという感覚は、高度経済成長期まではたしかにあった。じぶんたちが作る製品が、あるいはじぶんたちが担う公共事業が、敗戦後ずっと続いてきた国民の慎ましやかな生活を、アメリカの中産階級の豊かな生活にはとても及ばないとしても、それに近い生活へと引き上げることにつながると確信していた。
> …（中略）…
> けれども、第三次産業が中心で、かつグローバル競争に深く巻き込まれている現代の会社勤めに、そういう感覚はともないようがない。

改めて地域歴史遺産を問い直す　＝　改めて阪神・淡路大震災経験を問い直す

“ボランティア元年”　“社会貢献という感覚”　“公”的なもの

伊丹市立博物館聞き取り事業（『阪神・淡路大震災　伊丹からの発信　手引・資料編』2011 年）

被災体験　⇒　話しにくいこと　／　震災対応を職務に即して聞く　⇒　話しやすいこと

自治会活動の急激な衰退と諦念　／　地縁的つながりの煩わしさ

“歴史文化を活かしたまちづくり”の具体的手法の提示

⇒“手始めに自治会の資料（区有文書）を整理してみませんか？”

コミュニティ活動の記録　＝　区有文書　＝　地域への**《社会貢献の記録》**として読み解く時代へ